

# **第3部**

## **全体報告会**

### **パネルディスカッション**

## 【全体報告会・パネルディスカッション】



●コーディネーター 藤井 聡 (京都大学大学院教授)

●パネリスト 大谷 新太郎 (阪南大学 准教授)

横山 葵 (NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長)

田端 和彦 (兵庫大学 教授)

**藤井** 各分科会での発表を拝聴しまして、「まちづくり」に取り組んでいる方々は人生や生活そのものをかけて、活力あふれる活動を各地域で行っておられることに、改めて感銘を受けました。住民や行政、あるいは商売をされている方々、経済界の方々、大学の先生といった色々な立場の方がおられて、人と人の“化学反応”のようなものをこのパネルディスカッションを通じて促進できたら、と願っています。それではまず、各分科会の成果について報告して下さい。

**大谷** 観光振興の分科会の発表について報告いたします。まず最初は「宝珠山を起点とした村づくり」です。この地域にはすでに色々な資源や魅力はあるけれども、課題もあります。特に足元に眠っているのに気付いていない価値を見つけ出すための活動をされています。課題解決のための取り組みを次々とやっていく中で、常に動かない思いを持ち続けていくと成果が出てくるんだということを強調されていました。2つ目は「上方の伝統芸能を活かしたまちづくり」。初心者でも上方芸能の魅力を楽しむことができるようなナビゲート的なコンテンツを用意されており、その成果について報告されました。課題としてはもっと広報面で外国人も含めて多くの人々にこうした魅力を広げていきたいということでした。3つ目は「余呉のええもん“探(たん) 験(けん)”企画」で、都市の住民に余呉の魅力をどう伝えていくか、そして感動していただき、また来ていただくかーそういうことを頑張っていきたいという報告でした。いわゆる着地型旅行商品と言いますか、地域がつくり上げるツアーをもうすでに具体的にいくつも実施されており、成果を生んでいるということでした。4つ目は「田辺市本宮町の地域資源を活用した着地型プラン事業で地域活性」と題する発表でした。本宮町と言うと、世界遺産登録以降、観光客が増えてハッピーじゃないかと、他の地域からみると思ってしまいがちです。ところが実際はバスツアーで駆けつ



◀ 大谷 新太郎氏

横山 葵氏 ▶



けて、さっと熊野古道を歩いてさっさと帰ってしまい、地域で過ごす時間も、そして地域に落とすお金も非常に少ないのが現状です。そういう中で地域の商工に関わる事業者の皆さんが自信を取り戻すための取り組みや情報発信をされているところです。具体的にそこを訪れると何ができるんだということを知りやすく伝えることができるコンテンツをつくり上げたいと力強くおっしゃっていました。5つ目の発表は「花なび（今の京都の花情報）ーソーシャルパワーで地域観光資源を輝かせる!ー」。生き物である花は刻々と変化しますから、タクシー会社の運転手さんや個人の方やNPOの方、あるいは大学生が花の写真を撮って、花の動態情報を集約してホテルや車のカーナビゲーションシステム、 아이폰のような小型情報端末などに提供していくための仕組みを構築され、成果を上げられています。最後の発表は「新今宮観光インフォメーションセンターの運営とまちづくりに向けた社会的実践」でした。大阪の新今宮地域に外国人旅行者、特に個人旅行者、いわゆるバックパッカーと呼ばれる人々が訪れ、簡易宿所に泊ってくれるような地域にしていくという取り組みで、すでに実績を上げています。旅行情報や観光情報を提供するインフォメーションセンターを設けたその活動内容と成果について報告されました。以上、6つの報告を通して感じたのは、取り組みとしては年数も重ね、かなり力を入れてこられて実績をあげられている事例が多く、そういう中で今後の取り組みの発展に向けた課題解決に向け、こういうことに取り組んでいきたいという強い意気込みがあったことでした。「観光」というテーマで個別に発表していただきましたが、それぞれをつなげていくと、例えば「上方の伝統芸能」と「新今宮観光インフォメーションセンター」、「本宮町の熊野古道」との連携といった横のつながりができて面白いのかな、とも思いました。新今宮地域に泊ったバックパッカーに上方伝統芸能を楽しんでもらうような提案をしたり、本宮町の熊野古道を歩いてもらうような案内をしたり、といったことです。観光というのは形のない商品ですが、どうやってお客様に商品の存在を知らせて予約をしていただき、現地に足を運んでいただくかというのが意味流通なんです、そこがどの地域にも共通した課題だというご指摘もありました。

**横山** 地域資源活用分科会では、自然や生き物を相手にした地域資源というような形で光を当てたものや、自然そのものの里山に光を当てて地域資源として取り組まれているもの、都会の川を地域資源として活かしたもの、まち並みやお寺、建物を地域資源に活かしたものというような発表をしていただきました。



◀ 田畑 和彦氏

藤井 聡氏 ▶



1つ目の発表は「神戸空港西緑地人工池でのウミガメエコツーリズム」です。ウミガメを活かした地域資源という考え方をされていて、本来ウミガメを守るという視点から色々な調査をされている団体さんが、船との衝突事故で死んでしまうのを何とか保護しようという動きから始まった取り組みです。こうしたレスキュー活動の中からさらにツーリズムという形を作って、多くの人にウミガメの存在を理解していただくとともに、守るということの大切さをわかっていただくことを活動の中に取り入れられています。2つ目の報告は「孟子不動谷の里山自然を活かした地域活性化の取り組み」。里山というものは人がいて里山だということに着目され、子どもたちに未来永劫、里山を引き継いでいきたいとの思いから、地域の方々が無農薬にこだわり、色々な活動をされています。3つ目は「水の都を活かし人々の心根をやさしくする地域活性化」です。大阪の市街地を流れ、天神祭には大変なにぎわいを見せる大川を活かして、天の川を作ろうという取り組みです。川の中に人工的な異物を流す（最終的には回収する）ことによって、人々に川を意識してもらうことが目的です。具体的には、1個1,000円で販売したLEDを仕込んだ球の中に願いを込め、川に流して光り輝く天の川を演出するという内容で、今回は3,000個でしたが、次回は5万個ぐらい放流したいということでした。4つ目の発表は「大阪市天王寺区大江地区の四天王寺を活かしたまちづくり」です。この地域に古くからある四天王寺を活かして、門前町の商店街や地域の町会の人々が一体となってまちづくりをしようというところからスタートした取り組みです。七夕にスポットを当てて、色々なイベントを実施されたり、地域の野菜を売ったり、特産品ということでスイーツを開発するほか、放置自転車の整備など、多方面な取り組みをしながらひとつひとつの町の課題を解決し、活性化につなげていくことを事業とされています。5つ目は「ダリアの華で地域を元気に!宇陀松山華小路2009」というイベントをされた方からの報告でした。奈良県宇陀市というところは全国一のダリアの球根の産地だそうです。球根を育てるために摘み取った花を再利用して路地に敷き詰めてみたら、町の人々がとても関心を持ってきて、ダリアと町の人たちがすごく近くなったということです。

最後は「田尻町の田尻歴史館を活かしたまちづくり」と題した発表で、メンテナンス会社が指定管理者となって建物をメンテナンスしながら活かしていくという取り組みでした。地産地消にこだわったレストランも開かれており、地域住民も応援しているということも、とても魅力的な場所になっている要因のひとつ





つになっているようです。これら6つの発表を経て、地域資源というのは色々な形でいろんなまちに存在し、そこに住む人々の思い入れで光っていくものなんだなということが分かりました。議論の中で出た声を紹介しますと、「地域のまちづくりについて、応援する事業をやってほしい」「行政の縦割りが解消されるとより一層、うまくいくのではないか」「地元住民がもっと自分たちの地元を知ることができるような事業を支援してほしい」「広報のセンスが行政側に用意されていれば、自分たちの活動もよりよくなるのでは」「行政は日本地図を見て事業計画を立てているが、これからはふるさととの地域の地図で色々な話ができるような仕組みになってもらえないだろうか」・・・等々です。

**田端** 地域コミュニティ分科会の発表では、6つの団体のうち3つが平成21年にできたという新しい団体でした。発表順に、最初は新しい団体で「串本の海をまもる、地元『民・官』の協力した取り組み」。和歌山県庁の方からの報告でした。地元のサーファーと一緒にのごみ拾いや清掃をやっていく中で、まちを盛り上げていく方向を考えていく活動です。2つ目は「地域を流れる飛鳥川の自然を通した地域コミュニティ作り」で、ここもまたごみ清掃からスタートした取り組みです。地元出身の大学生が小学生たちに働きかけて水生生物の観察会を行ったり、「じゃこ取り」を試みるなど、色々なアプローチから川への関心を持ってもらおうということです。この活動を通して、大阪府のレッドデータで絶滅危惧種に登録されている「カワバタモロコ」という種が見つかったそうです。3つ目の発表は「住・職・楽、みんなで取り組む都心のコミュニティづくり」です。こちらは10年以上活動されていますが、先の2つの団体と同様に最初は清掃から始まったところが興味深い。ビジネス街という地域柄、関わるのは住民というより企業という形ですが、清掃が方向性の異なる団体をつなぎとめ調整していくひとつのカギになっていたことが、面白いと思います。4つ目は「『稲荘農場まちづくりの会』と『ダンボールコンポストによるごみ減量』の取り組み」。新興住宅地域で周りに農村はあるがそこは農地ではない、という地域での町内会の取り組みです。各家庭にコンポストを設置して肥料を作ってもらい、地域通貨と交換でその肥料を提供してもらい作った野菜を安く売る、という活動です。地域になかなか定着できない住民が地域や環境、食育について考えるきっかけになり、農業をうまく使って住民同士のきずなが深まったという意味でも、成果を上げています。5つ目は「堺に縁ある“すすめ踊り”を絆とした人が輝き元気な地域づくり」で、



第3回発表会にも参加した団体（堺すずめ踊り協賛会）の異なる活動の発表です。すずめ踊りとは、堺の職人たちが伊達政宗の石工として働いていて、伊達藩のあった仙台で生涯を送る時に故郷の堺を懐かしみながら踊ったというのが由来です。平成17年に「発掘」されたこの踊りを町衆のまち、堺の地域の柱にしようということで、様々な普及活動をされていますが、例えば教育現場にはなかなか浸透できないのが悩みだとおっしゃっていました。

最後は「日野川に砂れき河原をとりもどす活動」ということで、NPOから学校、組合、協会、河川管理者、企業、研究機関までありとあらゆる関係者が一堂に会して組織し、300人以上集めるようなイベントを開催されておられます。マネジメント、調整が大変だったのではないかと推察されます。各団体の報告の後、自由討論をしましたが、「地域には底力が必要。そこからアピールしていかないと行政はなかなか動いてくれない」「動き出して10年経って伝統ができてくると、今度は行政の方から事業を押しつけられることもある」「単年度事業ではなく、行政はこういうプロセスにずっと寄り添ってほしい」等々、色んな意見が出ました。ともあれ、行政と市民との関わりについて活発な議論、意見交換がありました。

**藤井** 会場にいらっしゃる方から何かご感想・ご意見・ご質問などはありませんか？

**NPO法人自然回復を試みる会・ビオトープ孟子** 先ほど、「砂れき河原」という言葉を聞いて、非常にうれしかったです。こういう言葉がちゃんと市民権を得ているんだなということで。今はほとんどの川の上流にダムが作られて、水が氾濫しない川になってしまったために河原にたくさんの木が生えているんですよ。しかしそもそも川というものは暴れるもので、河原に草むらはあるけれど大きな木なんて生えないのが普通なんです。川は暴れて当たり前で、氾濫した時に川の水を田んぼなど他のところにうまく流すという方法は昔からあったはず。私たちはそういったことをちゃんと子どもたちに伝えていかなければならないと思います。

**会場男性1** 発表のあった平成OSAKA天の川伝説実行委員会は、「天の川伝説」とタイトルに上げて活動されているのですが、枚方市に天の川というのがあるのをご存じでしょうか。枚方市も七夕にかかわる由緒のある神社があり、施設もあるんです。それで枚方市は、天の川伝説サミットをしようと、熱を入れてやっています。



ですので、その枚方市との連携というのもよいのではないかと思います。同じ淀川水系の中で、「天の川」というのが1つの流れでできるのではと思いました。それだけに、両方がばらばらだというのはもったいないような気がしますし、活力がばらばらになっているというのは、少し残念な気がします。

**会場男性2** 提案ですが、こういった発表会をもっと広い場所でやって、たくさんの観衆に見てもらい、もっと外に伝播していかないと、せっかくの皆さんの取り組みがもったいないなあとと思います。かなり成熟した団体も新しい団体もおられて、それを素人の方々が聞いて感動し、自分たちもやろうかな、となっていけばいいのでは…。

**藤井** 私も同感です。今回の報告を聞いていて思ったんですが、それぞれに物語があるんですね。その物語は報告書とは違って、人々の思いがあって、それ物語化すると多分色々な人に届くと思います。物語が伝えることができるようになると、地域がどんどんつながっていくのではないかなあとと思いました。

**会場男性3** 分科会で皆さんのお話を聞いていたんですが、それぞれの場所に訪ねてみたいと思いました。結果じゃなくて、その結果を作りだしてきた皆さんの思いを聞いてみたいんです。そこで、みんなと一緒にに行くというプランニングはいかがでしょうか？

**藤井** それはいい話ですね。近畿地方整備局さんがちょっとコーディネートされたらうまくいくのではないかな、という気がします。

**会場男性4** このような発表会は各都道府県で同じようなことをされているんじゃないかと危惧しているんですが…。互いの連携がないままにやっているとすると、何か二重のような気がしますし、そのための予算が無駄だと思います。そのあたりのところを近畿地方整備局さんは、当局として各都道府県と連携を取られて、これからのあり方を再構築していただきたいです。

**藤井** おそらくそういう会合を各都道府県でやっておられるとは思いますが、今回のキーワードは「関西」です。関西に寄せる特殊な思いがそれぞれにあって、そういう集まりやネットワークというのは自治体の中だけではなかなかできないところも多分にあるんですね。そういう意味でおそらく近畿地方整備局さんでやられるとしたら、関西や近畿といったネットワークというのは重複なくできるようなポイントのひとつになるのではないかと改めて思いました。





先ほどのご提案で、色々な場所をみんなで訪問するという話がありましたが、そうすることで何かつながり、そして何かが始まります。始まるとまたつながりができて、いい方向のスパイラルができます。箱モノを計画で作ることも大事ですが、それだけではない、国の政治のやり方の最先端の取り組みとして、こういう事業がうまくできることに期待したいと思います。（敬称略）

#### 〔コーディネーター・プロフィール〕

##### ◆藤井 聡（ふじい さとし）

京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻教授。1968年奈良県生まれ。京都大学卒業後、同大学助手、助教授、スウェーデン・イエテボリ大学客員研究員、東京工業大学助教授、同大学教授を経て、2009年から現職。

専門は土木計画、交通計画、ならびに公共問題のための心理学。動的交通需要予測研究で1998年土木学会論文奨励賞、社会的シレンマ研究で2003年土木学会論文賞および2007年文部科学大臣表彰・若手科学者賞、認知的意思決定研究で2005年日本行動計量学会優秀賞（林知己夫賞）を受賞。

また、2006年に『村上春樹に見る近代日本のクロニクル』にて表現者奨励賞、2008年に『モビリティ・マネジメント入門』にて交通図書賞を受賞。

主な著書に『なぜ正直者は得をするのか』、『社会的シレンマの処方箋』、『土木計画学』、『合意形成論（偏著）』、『土木と景観（共著）』、『社会心理学の新しいかたち（共著）』等がある。

#### 〔パネリスト・プロフィール〕

##### ◆大谷 新太郎（おおたに しんたろう）

阪南大学国際コミュニケーション学部国際観光学科准教授。1974年富山県生まれ。立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士課程後期課程修了。

七尾短期大学専任講師を経て現職。専門は観光産業論、観光情報論。特に情報通信技術が観光者、観光産業、観光地に与える影響に関心を持つ。

和歌山大学観光学部非常勤講師、総務省地域情報化アドバイザー、立教大学アミューズメントリサーチセンター（観光プロジェクト）特別研究員。

主な著書に『観光事業論講義』（共著）、『観光実務ハンドブック』（共著）等がある。

##### ◆横山 葵（よこやま あおい）

NPO法人「人と自然とまちづくりと」理事長、NPO法人「ミナミまちづくりフォーラム」理事、(有)エイライン代表取締役。技術士（総合技術監理、都市及び地方計画／道路）。まちづくり、道路設計、公園設計、建築計画、景観デザインの仕事のかたわら、まちづくりや環境団体の活動促進やネットワーク・交流の企画、コーディネート、行政との橋渡しなどを行っている。NPO法人「人と自然とまちづくりと」では、人と自然が、人と人が心豊かに共存できるまちづくりを軸に、環境の創造・再生を行う活動を行っている。

##### ◆田端 和彦（たばた かずひこ）

兵庫県生涯福祉学部社会福祉学科教授。1964年三重県生まれ。広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期修了。学術博士。

1993年に広島大学助手、1995年、兵庫大学講師、同大学経済情報学部経済情報学科准教授を経て、2008年に生涯福祉学部発足により、現職。

専門は地域経済学、地域政策論、地域福祉。2007年まで兵庫県の外郭団体である（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構地域政策研究所で、主任研究員を務め、地域再生や競争力向上に関する研究にもあたっている。

著書に『参画と協働－理論と実践』他、また論文に「地域の産業創発の国際比較」、「地域の競争力向上とガバナンスのあり方」等がある。